

「前方後円墳」の名付け親

小学校の社会の教科書に、古墳時代を象徴する歴史用語がでてくる。「前方後円墳」である。日本を代表する墳墓形式として有名である。この前方後円墳の名付け親が、宇都宮生まれの思想家、蒲生君平 (1768—1813) である。

蒲生君平(以下君平と略)は、宇都宮の新石町(現宇都宮市小幡町1丁目)の半農半商の油屋、福田正栄(又右衛門)の四男として生まれた。

幼名は伊三郎。幼い頃から近くの寺で読み書きを習った。その熱心さは「近所の火事のあかりで読書をした」というエピソードが生まれるほどであった。

君平13歳の時、祖母から「先祖は戦国の武将で、会津城主の蒲生氏郷である」と聞かされた。

蒲生氏郷は豊臣政権下の大大名で、名将である。君平は自らが「名族の末裔であることを知り、いよいよ好学の志を固めた」のである。

鹿沼の儒学者、鈴木石橋に師事し、さらに黒羽藩家老、鈴木為蝶軒の門を叩いた。また、生涯の友となる水戸藩の学者、藤田幽谷と

交流を深め、進むべき道を確立していった。この頃、福田姓を改め、「蒲生」姓を名乗り、名も君平とした。

君平は、水戸藩の藩士や学者たちとの交流を通して「歴代の王室の墓所を敬うことこそ治世の根幹である」との思いを強めていった。水戸藩二代藩主、徳川光圀は幕府あての「山陵修復建白書」の草稿を臣下に作らせながら、その実現をみないまま亡くなった。君平はこのことを知っていたようだ。

全国を回って尊王を唱えていた高山彦九郎や海防の必要性を説く林子平と会うなかで、君平の思いは凝縮し、決意が固まっていった。「荒れ果てたままになっている山陵(天皇・皇后の墓所)を修復して、しっかり祀ることが國の根幹である」と。

この決意を胸に、君平は寛政8年(1796)と寛政11年(1799)の二度にわたり、関西や四国などの山陵を自らの足で歩いた。その陵数は合わせて約百陵。資金は借金を含め自腹。二回とも京都の知人宅に逗留しながらの調査だった。

蒲生君平

Samou Kumpei

調査結果を基に、君平は『山陵志』の著作に入った。が、いかに出版資金がない。予約を募って前金を集めたり、江戸・日本橋の商人の援助を得て、文化8年(1808)、100部を発刊した。

『山陵志』は、世話になった関西の有力者や江戸の大名に配られ、大きな反響を呼んだ。反響は幕府にも届き、「浪人の身のくせに過ぎたることを…」と尋問を受けた。これに対し君平は文書で次のように書き述べた。

「水戸光圀公の遺志を継いで浪人でありながら、山陵を探索してまとめ上げた書である」と。その後、幕府儒官の口添えもあって難を逃れた。

「前方後円墳」の名称は、『山陵志』の中で初めて使われた。このため君平が名付け親となったが、『山陵志』の刊行は、それ以上に多大な影響を与えた。

君平没後50年の時を経て、山陵の修復が宇都宮藩によって実現されたのである。それは幕府に替わって天皇を中心とした明治の

新政府誕生を予感させる前兆でもあった(文中敬称略)。

主な参考文献

『二百年祭記念蒲生君平』(平成25年、没後二百年祭記念実行委員会発行)、『寛政三奇人伝—林子平 高山彦九郎 蒲生君平』(安藤英男著、昭和51年、大和書房発行)など。



宇都宮藩知事が建立した君平の勅旌碑
=宇都宮市花房3丁目、筆者撮影

偉人から読み解く「先祖力」のヒント

歴史ジャーナリスト

茨城県郷土文化研究会 会長
ヒタチノデザイン研究所 所長

富山章一